な研究以外の章はない。いずれもはっきりとした問題意識をもち，解決に迫ろうと気迫にもえた章ばかりで，慢然と知り得た事実を列挙しているような箇所はない。

定期市関係以外の論考を採録するどころか，著者の定期市関係の既発表論文の半分は割愛されて，本書には収められてない。いかに厳選され焦点をしぼっての著作であるかがわかる。

今後定期市の研究を志す人は，その専攻が人文地理であろうと他の学問であろうと，本書の精読からはじめねばならない事は確かである。本書の精読により，定期市研究の問題点と現在までの到達点を的確に把握することができる。一面，この方面を研究する気はないが定期市についてもちょっと学んでみようかという位の気持では，本書の通読はなかなか困難なことと言える。別の機会に豊富な研究経験をふまえて，誰にも気軽に読める定期市の解説書を出していただければ幸いである。

ある先輩から書評のコツというのを教わったことがある。7～8分通りはほめて，後の2～3分は「望蜀の感」として若干の苦言・注文をつけるのが良いとのことであった。実際そのように書かれている書評が多いし，その気積りで書くと書きやすい。それが今回はできなかった。「望蜀の感」が見当たらないのである。強いて挙げれば文字通りの「無いものねだり」になるか，人間一人の能力の限界を超えたことを要求することになるからである。

定期市について多少は研究をしたことがある一人として，本書から多くのことを学ばせて頂き，研究の指針を与えて頂いたことを著者に感謝して筆をおく。　（中島義一）

山本正三・北林吉弘・田林　明　編著：
『日本の農村空間―変貌する日本農村の地域構造―』

古今書院　1987年10月
A5判　423ページ　5,800円

日本農村の社会的・経済的な構造が第二次世界大戦後，殊に1950年代後半以降に顕著になった経済の高度成長と急激な都市化の過程を通じて激変したということは誰しも周知のことであろう。農村あるいはムラの崩壊が言われて既に久しい。だが，一方では農村は変わらないとの見解も併存しており，農村の崩壊論や変動論に譲ろうとしない。これまた周知のことに違いない。いずれが事実なのであろうか。

これは要するに農村の社会的・経済的な諸側面の一半を強調した観察結果からの一般化であって，双方とも事実の一半をいい当てているものと一応は解されよう。だが，いったい日本農村のどういう側面が変化（崩壊）し，何が不変なままなのだろうか。昨今は学界での農村研究が著しく不振であるために，このような疑問にすら容易に解答することが難しい状況にある。

確かに最近でも全国各地からの臨場感あふれる農村レポートや狭域的な調査報告の類はかなりの量がある。しかし，これらから農村変動の実体や今日の状況を一般化するのは躊躇すべきであろう。日本の農村と一口にいっても全国的にあまりに地域差がありすぎるからに他ならない。それは，ある側面に関しては今日ますます顕著になってきつつある。今日の農山村の実体を正確に認識するには，問題意識を絞った体系的・広域的な実体調査に基づいた研究がどうしても不可欠である。本書はそのような要望に応えてくれるであろう。本書は1950年代後半以降の日本の農山村は著しく変貌したという現実的な観点に立脚し，その変貌の主要因を農山村経済の都市化（非農業的な経済要素，つまり農外就業の浸透あるいはそれへの労働力の流出）と規定して，その実体を全国的に調査分析しようとした，実に気宇壮大な試みの成果をまとめたものである。

本書は大きく2部に分けて構成されている，「農村空間の諸類型」と題された第Ⅰ部においては，全国および各地方の農村空間の詳細な区分が行なわれ，その実体が概説されている。それらの章と執筆者を列記すると，第1章　日本の農村空間〔山本正三・田林 明〕，第2章　北海道の農村空間〔山本正三・田林 明〕，第3章　東北地方の農村空間〔斎藤 功・斎藤一彰〕，第4章　関東地方の農村空間〔山本正三・斎藤 功・田林 明〕，第5章　北陸地方の農村空間〔山本正三・北林吉弘・田林 明〕，第6章　中央高地の農村空間〔赤羽孝之・小林浩二〕，第7章　東海地方の農村空間〔宮崎 清・小林浩二〕，第8章　近畿地方の農村空間〔宮崎 清〕，第9章　中国・四国地方の農村空間〔内山幸久〕，第10章　九州地方の農村空間〔山本正三・石井英也・桜井明久〕となっている。

続く第Ⅱ部は「農村の諸相」と題され，ここでは全国各地の農山村の実状が具体的に分析されている。

同様に章（副題省略）と執筆者名を列記すると，第1章　大都市圏の近郊農村〔斎藤　功・菅野峰明・吉田昌子〕，第2章　富山市近郊の通勤農村〔北林吉弘〕，第3章　豊田工業圏の農村〔松井貞雄〕，第4章　信州の工業化農村〔赤羽孝之〕，第5章　黒部川扇状地の農村〔田林　明〕，第6章　阿武隈山地における後背農村〔山本正三・石井英也・山下清海・村山祐司・菊地俊夫〕，第7章　十勝平野の農業と農村の変容〔市川健夫〕，第8章　長野県小布施町における果樹生産の発展過程〔内山幸久〕，第9章　阿蘇南郷谷の農村〔規工川宏輔〕，第10章　酒造出稼農村〔松田松男〕，第11章　四国山地の過疎農村〔篠原重則〕，第12章　中央高地のスキー集落〔白坂　蕃〕，第13章　志摩半島の民宿集落〔淡野明彦〕となる。

編著者および各章の執筆者をみてわかる通り，本書の執筆者は山本正三教授および東京教育大学や筑波大学において同教授から直接間接の薫陶を受けて全国各地で研究に従事している人たちで主に構成されている。したがって，本書は「農業や農村の現実を地域的に記述する役割を」地理学者はもっているとの同教授の心意に基づいて書かれている。極めて実証的・具体的な分析が目指されている。こういう参与観察的な実証的研究も，理論指向が強い近年では少々希少になって，むしろ貴重ですらある。

本書の第Ⅰ部では，沖縄県を除いた全国の農山村地域の今日における都市化の実体が，同質地域的な空間区分によって解明されている。その空間区分の手法は，本書の発端になったと思われる既発表の論文[1),2)]で概略が紹介されているように，かなりユニークなものである。

その方法は実際の調査経験から定式化されたものであろうが，それを概説すれば次のように要約できよう。まず，農家の理念的な労働力的家族構成を，就労可能な世帯主とその妻と子供（息子）の3人を含むものとみなし，それら3人の農外就労（出稼ぎや長期的な向都的離村を含む）との係わりの有無や程度（恒常的か臨時的か，安定的か不安定か）によっていくつかの理念的な類型を作る。例えば，3人とも恒常的安定兼業に従事する型（高度通勤兼業型）とか，世帯主が季節出稼ぎ，その妻が臨時的不安定兼業に従事し子供が都市に流出している型（農業主体型の自給農業・商業的農業・出稼ぎ型）といったようにである。調査を通じて合計13の地域類型が設定された。なお，農村空間の区分に際しては，高度通勤兼業型は，都市化の程度に応じて都市農村空間と郊外農村空間に2分されている。

かかる理念的な地域的就業構造類型を指標にして農山村の具体的な空間区分が行なわれるのであるが，それに際しては各県の農業地域に精通している農政担当者や地理学者から都道府県内各地の農家の就業構造の一般的なイメージを引き出して，先の類型のどれに近似するかを（研究担当者）が判定し，当該地域の就業類型を特定して空間区分していく方法が採用されている。因子生態学的手法でなく，いわば専門家のイメージに依拠して農山村の空間区分を試みたというところに，本書の特徴の一つがある。いわば実感的な農山村の実体分析といえよう。このような手法によって北海道から九州地方まで全国の農山村を包摂した広域的な空間区分が行なわれたが，その結果が詳細な図に基づいて第Ⅰ部で概説されており，近年の農山村の実状を概観するのに大いに参考になる。

第Ⅱ部は，第Ⅰ部において紹介された，ことの本質上やや抽象的・概括的な全国的な農村空間区分を，具体的なフィールド調査によって肉付けするという意図のもとに編集されている。ここに収録されている研究の多くは，山本イズムに沿った具体的な実体調査に基づいたものであるが，各自が熟知している居住地近傍農山村の特殊性や専門的関心の違いもかなり反映された多彩な内容になっている。

第1章は郊外農村空間類型の実体を分析したもので，具体的には埼玉県新座市が取り上げられている。本章の特徴は，現在の郊外農村空間に至るまでの都市化の経緯が通時的に概観されていることであろう。ただ，この事例では不動産収入による自営兼業や観光農園が多くみられ，より都市化の進展した都市農村空間類型の農村に近くなっている。

第2章は富山県婦中町の兼業化とその実体を分析したもので，本書の空間類型でいえば都市周辺農村空間に属しているといえよう。本章は永年にわたる調査によって県下農村の実状にとりわけ精通している筆者（北林）によるものであり，なによりも本書の主旨によく沿った典型的な内容をもち，最も読みごたえのある章と思われる。殊に第Ⅰ部で提起された家族就業構造による農村構造分析の有効性が実証されている節は白眉である。

第3章は通勤兼業農家地域の生産組織化を扱ったもので，松井貞雄氏の永年の研究が本書の主旨に沿

ってアレンジされたものである。第4章では，東信地方の工業化にともなう農業および農家経済の変化と現況が，詳細な実体調査を添えて紹介されている。第5章は，黒部川扇状地における圃場整備事業と兼業化にともなう農村景観・農業・農家の就業構造などの変化を具体的に把握したものである。第6章は，世帯主夫婦が臨時的不安定兼業に従事しその息子が恒常的安定兼業に就業するという後背農村空間類型の事例と思われる。山地を主な生産空間としていた山村の景観と土地利用，就業構造などの変化が通時的に要約されていて興味深い。第7章は十勝平野の入植から今日までの農業や生活文化の変遷が概説されており，本書の意図からやや逸脱した感があるが，市川健夫氏の造詣が披瀝されている。

第8章は長野盆地の果樹生産の発展過程を分析したものである。本書の主旨に照らし合わせてみるとやや違和感を覚えるが，果樹生産地域の形成過程や近況を知るには参考になろう。第9章は阿蘇南郷谷白水村の農牧業の推移を概説したもので，前章と似た感想を与える章である。第10章は，酒造出稼ぎ兼業で著名な丹波篠山町における農業構造と兼業形態の変化と実状を分析したものである。事例集落の詳細な実体調査の結果はなかなか興味深い。第11章は四国地方の過疎化の経緯と実状が，2つの事例集落の実体調査に基づいて例示されている。著者の永年の過疎研究の一端が紹介されていて読みごたえがある。第12章と第13章は観光に依存する自営兼業農村空間を紹介したもので，前者は長野県栂池高原のスキー集落を，後者は志摩半島の民宿集落を対象にしたものである。いずれも既発表の論文を簡潔にアレンジしたものである。

以上，誤読や曲解が多々あるかと思われるが，およその内容を紹介した。最後に，本書を読み終えて感じる読後感めいたものを列記する。

まず，本書のような組織的・広域的な農村研究は近年では稀有のことであり，農村研究にいささか係わる評者は快哉を叫びたい。山本教授の熱意と組織力には敬服せざるをえない。ただ，本書の価値を十分認めた上でやや苦言めいたことを言えば，第Ⅰ部で提起された研究意図や定式化されたユニークな分析手法が，第Ⅱ部のいくつかの章で十分には貫徹されていない点がやや目立つ。むろん，そのような章も農山村の変化や現状を理解する上で有意義には違いないが，Ⅰ部とⅡ部の連続性がもっと図られていれば本書の価値は一層高まったものと思われる。しかし，これは多様な専門と問題関心をもった研究者による共同研究に宿命的な欠点であろう。

これとも関連するが，本書を読んで農山村の変容を体系的に分析することがいかに困難かという感じを強くもつ。つまり，本書で意図されたように農山村における構造的変化の要因を都市化（農家労働力の農外就業化）に限定して把握することの限界のようなものを痛感する。確かに近年の農山村は都市化を主要因にして変容したといえるし，空間パターンの解明を使命とする地理学が都市化を主要因とみなすのは十分納得できるが，その他，例えば農業生産力の発展とか農産物価格の変化など都市化と相互に錯綜しながらもある程度の自律性をもった多様な要因が作用していることは言うまでもなかろう。上で指摘したⅠ部とⅡ部との問題意識や分析手法にみられる齟齬の一部はこれに起因しているのかも知れない。失礼なことを言うようであるが，今後一層の展開が期待される。

なお，本書の書評は本誌の編集子の示唆によるものであるが，内容的に本誌にふさわしいかどうか若干懸念される。しかし，本書には古くは近世にまで遡った歴史的な分析が随所にみられるし，また，区分された農村空間の境域はかなり長期にわたって持続する傾向があるようであるから，現況を把握した農村空間区分も過去の歴史的事象の研究に際して有効な参照枠を提供するものと思われる。

〔注〕

1）山本正三「日本における農業地理学の課題」地理20-1，1975，16～24頁。

2）山本正三・田林　明「黒部川扇状地における農村の変貌」人文地理27-6，1975，33～59頁。

（浜谷正人）